

第 61 回 2015 年春の中高時代の同級会から

2015 年春、60 年前に卒業した中学・高等学校時代の同級(年)会である「TG-30会」があった。1956 年に卒業した高等学校時代の同級生はみな 77 歳以上になっていた。入学時は 164 名であったが、同級会当日の出席者は遠方で出席が難しかったためもあり、20 人足らずであった。

筆者は中学校と高等学校は同じ私学の 6 年間中高一貫教育を受けたが、小学校の 6 年間は太平洋戦争中の空襲による校舎焼失のため、1 年余り近郊の別の学校で学び、大学は医学部 6 年間教育であった。結局名目上は小学校、中学・高等学校、そして大学と、それぞれ連続した 6 年間の教育を受けたということになる。6 年間一貫教育の意義などについて最近見直されているようであるが、それについてはとくに本稿の意図する主題ではない。自分自身が経験したそれぞれの時期の 6 年間を通した教育については、ひとつにそのお陰でそれぞれの時期で多くの心の通った友人に会うことができたと思っている。当たり前のことだが、年齢を重ねるにつれ近年は、永く心に残っているそれらの時期の友達の数が少なくなっている。中・高以前の時代の友人は会えばなおさら懐かしい。

入学当時国民学校といった小学校時代、太平洋戦争末期の国民学校(小学校)3 年生であった 1945 年(昭和 20 年)7 月仙台大空襲でわが家も焼けてしまい、その日のうちに次兄とともに市内から北の一山か二山超えたところの、現在仙台市泉区に属する実沢の川西というところに徒歩で疎開した。川西には当時筆者の父親所有の土地と炭酸ガス製造工場や清涼飲料水製造工場があり、小高い山のほぼ南側の裾野にあたり、またその南側は七北田川の流れて区切られているようなそれほど広くはない場所であった。太平洋戦争末期の金属原料不足のため、工場の多くの金属機械類が供出されてしまい、辛うじて清涼飲料水が製造できるような機械類をわずかに残っているというような、跡地のようなところに疎開したのである。幸いなことに跡地とそれよりもやや小高い平坦なところに社員用の宿舎は残っており、その小高いところの家でおよそ 1 年あまり次兄とともに祖母の世話を受けながら過ごしたのである。その時期のことは、これまで筆者の短編随筆集や学長特別寄稿シリーズなどにも書き記している(直球・変化球 p.157,続々直球・変化球 p.56,仙台青葉学院短期大学 HP2014 年 6 月「源泉の話」)。

1996 年 6 月 17 日の河北新報にその場所についての記事があったが、それには「繁栄の時、今に伝えて一実沢戸平に残る井戸—当時の花形産業支え」という見出しで「仙台市泉区で第二次世界大戦終戦の前年まで、地元で湧き出る天然の炭酸水とガスを使い、炭酸

飲料のサイダーとラムネが製造されていた。その味を知る人は少なくなったが、今も残る井戸だけは、炭酸飲料で栄えた時代を現代にしのばせてくれる。」という前文に加えて詳細な説明文があり、「今も残っている炭酸水が湧きだしていた井戸」という筆者にとっても懐かしい写真も掲載されていた。

当時を懸命に思い出してみると、徒歩で市街地郊外を過ぎて山道に入り、いくつかの山を超えると別世界のような環境となり、田舎道を辿ってその川西にたどりついた。日常生活が激変してしまった両親と離れ離れの2年間であったが、特別苦しかったことや悲しかったことなどは殆ど断片的にしか思い出せないのである。仙台空襲があった翌日から翌年の夏が過ぎるまでの期間、当地の小学校に転校した。川向こうにある小学校に通わなければならない、帰校途中にはよく寄り道したし、そのうちによく休むようになってしまった。当時からそのようなことは山学校といわれたものである。蛇やカエルをつかまえて遊んだことや、食用になるシマヘビを追いかけたことなどをよく思い出している。学校を休みがちになったのは、地元の子供たちのいじめにもあったことが一因でもある。

小学5年生の秋頃に馬車の荷台に便乗して仙台に帰ったが、帰途の途中仙台市内に入った際の身近くで聞こえてきた仙台弁が涙出るほど懐かしく、帰宅後早期の頃は父母や兄弟などのことよりも小学校での旧友に逢い、仙台弁で話げできたことがより強い思い出となっている。

終戦後まだ混乱時期の小学校に戻った時、学校には1年前を思い出させるものは殆ど無かったといってよい。クラスには歯科医院の息子であるボス児童がいて教室を牛耳っていたが、かれは空襲前から拙宅から一丁程度のところに住んでいた。そのボスは現在仙台の中央部で同じ歯科医となった自分の娘さんと共に元気で歯科医院を開院しており、筆者も時々患者の一人としてお世話になっている。彼は筆者とは中学と高校も同じであり、同年生として卒業年から名付けられた「TG-30会」で毎年でも会うことができた。

小学校時代の事が長すぎた。中学から高等学校卒業までの6年間は、筆者にとっては最終年にあたる高校3年生の時期に病休したため、正確には7年間であり、現在は高校病欠1年間を除いた5年間の同年生として「TG-30会」に属している。高校3年生1年間のみの時期の同級会は別にある。

中学・高校の母校は私学であったが、当時教育レベルが高く、汽車通学をしている生徒が多々おり、高卒後著名大学に進学する者も多かった。

「TG-30会」には代表幹事以下複数のかつての同年生により構成される幹事会が組織され、その企画・案内のもとに昭和30年(1955年)以来毎年のように開催されてきた。筆者は近年、大概毎回出席しているが、今年5月の平成27年度総会で代表幹事から本年度総

会が最終としてはどうかという提案があった。最終的にはアンケートによって決められるというが、ともかく 60 年間続いてきた「TG-30会」の会費は今後請求されないことになったのである。

いわば最後となる中学・高校の 5 月同級会でこれまで殆ど顔を合わせたことがないような、現在関東 HN 市に住まわれている A.I 氏と同席したが、氏は積もる話のなかで最近 99 歳で亡くなられたご自分の母君の遺品のなかから、66 年前の TG 中学入学者の始業式翌日に行われた学力考査成績表が発見されたと話された。その母君は成績表を仏壇の引き出しにしまわれていたとも聞いた。A.I 氏に早速そのコピーを送っていただくように依頼したところ、数日後に長文の手紙と共に送られてきたその成績表には今も懐かしい同級生の名前が多くみられた。A.I 氏は、汽車通学をされていた学友のひとりであった。

かつての同級生あるいは同年生の集まりのなかで、小学校時代の多くの同(年)級会はずでになくなっており、「TG-30会」の友人も次第に少なくなり、それも今年で最後となってしまった。

昔の友達は大切な宝物であることをつくづく実感しているこの頃である。

(2015 年 7 月 13 日 記)